

氏名	荒川 清 秀		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	第3499号		
学位授与年月日	平成10年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者		
学位論文名	近代日中学術用語の形成と伝播 —地理学用語を中心に—		
論文審査委員	主 査 教 授 三浦 國雄	副主査 教 授 山口 久和	
	副主査 教 授 山野 正彦		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代科学言語としての実例をいくつか取り上げ、それらがどこでどのように造られ、どのように伝播したかを、実証的に考察したものである。

第一章は、従来中国で和製漢語と考えられていた「熱帯」が、中国製漢語であることを語の要素から論じる。すなわち、「熱帯」は中国の『漢語外来詞詞典』には日本製漢語とされていたが、日本語なら「暑帯」となるのが自然で、「熱帯」となったのは、気候のアツサに「熱」を使う中国において造られたからではないかという仮説を立て、それをまず、明治期日本の訳語に大きな影響を与えたとされるロブシャイトの英華字典で確認するとともに、その起源が十七世紀に来華したイエズス会宣教師アレニの『職方外紀』(1623)、さらにマテオ・リッチの『乾坤体義』(1605)にあることを突き止める。

第二章では、和製漢語「回帰線」を取り上げ、これは十七世紀に長崎の日本イエズス会関係者によって造られた語で、『ラポ日対訳辞書』(1595)の定義—「日輪ノメグリツキ、メグリカエル南北ノサカイ」の「メグル」と「カエル」に漢字「回」と「帰」を当てて造られたものだと結論づける。

第三章では、その長崎で生まれた「回帰線」が薩摩へ、また江戸へ、そして明治へと伝えられる過程を、林子平、桂川甫周、さらには江戸の天文方に集まる洋学者らの著作を通して跡づける。

第四章では、明治二十年代に日本で地理学用語として確立した「回帰線」が、日清戦争後に中国へ伝えられるいきさつを、時の啓蒙地理学者矢津昌永と、中国人留学生呉啓孫、その父呉汝倫らの交友を通して探る。

第五章では、日・中の地理学用語でゆれのあるケースを「海流」を例に考察し、何故「温流」ではなく「暖流」が、また「冷流」ではなく「寒流」が使われるのかという問題の検討を通して、これらの上位概念である「海流」に辿り着く。

第六章では、日・中で訳語に違いが生じたケースを「貿易風」と「信風」を例にとって考察するが、同時に、「貿易風」を誤訳と考える説に対し、言語の意味変化が訳語の違いをもたらしたことを説く。

第七章では、十七世紀のイエズス会宣教師から十九世紀のプロテスタント宣教師たちの著作、さらには二十世紀初頭の日本訳語の影響を色濃く受けた地理書、英華・華英字典を通し、これまでの全六章で論じられなかった他の比較的ポピュラーな地理学用語の全体的な流れを語史的に追跡する。

「付論」は、サンフランシスコ＝「桑港」を例に、音訳地名の問題に触れ、従来和製漢語と言われていた「桑港」の「桑」が、『地理全志』にある「桑方西斯哥」の「桑」からきていること、ただし「桑」と「港」とを合わせたのは、万延元年の遣米使節団の団員によるものであることを論じる。

論文審査の結果の要旨

日本語の中には、中国語と文字表現を共有する夥しい漢語（日中同形語）が含まれている。それらの多くは、人や物や書籍の伝来を通して中国から本邦に伝えられ、日本語として定着したものである。しかし、近代になって欧米の文明・文化の移入、いわゆるウェスタン・インパクトによって成立したターム、とりわけ学術用語の中には、日本で造られたのか、中国の方が先行していたのか、その成立の素性がはっきりしないものが少なくない。従来、この方面では権威をもつ劉正焘・高名凱らの『漢語外来詞詞典』の断定に引き摺られ、日中共通の近代用語の大半は日清戦争以後、いち早く近代化を成し遂げた日本から中国へ、主に中国人留学生によって伝えられたと考えられていた。著者は、こうした一方的で単線的な見方に疑問を呈し、いくつかの地理学用語をモデルとして取り上げ、それらの素性と伝播の経路について実証的な検討を行うことによって近代用語というものの成立や伝播には多様なパターンがあることを証明した。方法としては、厳密な文献実証主義的方法とともに、中国語学の専門家として造語論からする考察も取り入れており、本論文の独自性を一層高めている。以下、論文の流れに沿いながら論評を試みる。

第一章では、「熱帯」という用語の成立と伝播が検討される。綿密な考証に間然するところはないが、「熱帯」なる概念はアリストテレスの時代から存在するものであって、十六世紀のマテオ・リッチ以来、「熱帯」という用語を使った人々はどのようなものとしてこれを観念していたのか、明確に定義しておくべきであろう。

第二章では、この語の成立が論じられ、メグリ（回）カエル（婦）に漢字が当てられるという、訓で考え音に返すという日本的な造語法が指摘される。

第三章では、章題「ことばの伝播と継承」が示しているとおり、「回帰線」の日本国内での時間的・空間的な伝播の様相が大きなスケールの中で精査される。

第四章の中味も「和製漢語の中国への伝播」という章題通りであるが、矢津昌永という啓蒙地理学者の業績の顕彰や、彼の『世界地理学』を漢訳した呉啓孫及びその父（清朝の高名な学者・呉汝倫）との交流の記述は、とりわけ生彩に富んでいる。

第五章では、「海流」が検討されるが、これは同時に、原語と訳語との関係を考える一つの「症例」にもなっている。ここでも著者は、もつれた糸を丁寧に解きほぐしている。

第六章では、「貿易風（来華宣教師製）」と「信風」（伝統的漢語）を取り上げ、日中で使用に違いが生じた理由を考察し、資料の博搜によって明確な筋道をつけている。

第七章は、総集編というべきもので、基本的な地理学用語を取り上げて、主に中国の洋学書を資料に使用して生成と伝播の全体的な流れを追っている。218頁～221頁の、英華・華英字典を中心に文献と関連する事件を時代順に並べたリストは後学にとって有益である。

総じて、著者が取り上げた語は上のように地理学用語に限定され、しかもその数は決して多くはないが、それらは各々大きなテーマを焙り出す媒体になっている。つまり本論文では、特定の語の素性探しが問題なのではなく、個別を通して普遍的パターンが求められているのであり、著者の狙いはほぼ達成されたと評価しうる。

また、文献調査の徹底ぶりも特筆するに値する。近代地理学用語の成立と伝播というこの一種学際的なテーマを考察するためには、中国語史、国語学、書誌学はむろんのこと、地理学史、科学史、中国洋学史、日本洋学史等に通じていなければならないが、著者はそれらのいずれの領域についても決して手抜きはしていない。しかも、惜しみなく自分の手の内を公開しているのは、後学に対する親切丁寧な道案内になっている。注の充実ぶりも特記しておきたい。なお、巻末の「文献目録」に藤田元春『日本地理学史』（1938年、刀江書院）を加えるべきであろう。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。